



「一月は往く 二月は逃げる 三月は去る」と言いますが、コロナ禍の閉塞感に満ちた時間は、牛歩のように遅々として進みません。ワクチンの接種が始まりましたが、一方で、PCR検査の対象者は制限するなど、相変わらずのちぐはぐな政策に不安がつのります。

東日本大震災からまもなく10年、これもまた、政府の愚策無策による人災が天災に拍車をかけた結果であり、被災地では、コロナ禍、大寒波、更に先日来の地震の頻発と、心休まる暇もない日々が続いています。こんな中で、本当に安心安全で心躍る「復興五輪」など開催できるのでしょうか。

森前会長の発言は、日本社会の在り様を世界中にさらけ出しました。我ら結成時から一貫して「わきまえない」、どんなに時間がかかっても、ワイワイ意見を出し合いながら創り上げてきた川口ぞうです。「それがなにか？」。

学校現場も落ち着かないまま、また卒業・入学の時を迎えます。まだまだ先は見えませんが、振り回されてばかりいるのはしゃくです。ここはひとつ新しい力を蓄えるために、よどんだ部屋の窓を開けて、まずはふ〜っと大きく深呼吸、少し時間を見つけたら、お気に入りの何かに出会える散歩にでも出かけませんか。

さて今回は、「ぞうれっしゃがやってきた」の作曲者、藤村記一郎さんがメッセージを寄せてくださいました。



## 川口ぞうれっしゃ合唱団のみなさんへ

「ぞうれっしゃ」をうたう全国の合唱団の中でも、とても素敵な方法で長く続けていらっしゃるのが、「川口ぞうれっしゃ」のみなさんです。初めて歌う方もベテランの方も同じスタートラインに立って目標とする音楽会成功に向かう、というスタイルは、初めて取り組む方にとって、歌える団員がたくさんいるところに入っていきのとは違い、引け目なく安心して参加できる方法ですね。

でも、30年もこうして続けて来られたのは、そのすべての人たちをつなぎサポートする、それこそ素敵な方々がいらっしゃったおかげですね。



コロナ感染拡大で全国のほとんどのアーティストは大きな打撃を受け、合唱団も音楽会の延期をやむなくされ、練習で集まることもできなくなりました。でも「歌うことをあきらめない」「工夫しながら前に進む」ということも、この間の経験で得てきたことです。

2019年には皆さんも参加して下さった「本物のぞう列車が走って70年」<全国つながりコンサート>を全国の皆さんと盛り上げました。今年は初演から35年、来年は東山動物園開園85年、いろいろな理由をつけてもつけなくても、この曲を愛して歌い続けてくださる皆さんを僕はいつも応援しています。

藤村記一郎（作曲者）2021年2月8日